

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所

〒220-8739 横浜市西区みなとみらい 4-5-3

神奈川大学 みなとみらいキャンパス 11 階

TEL 045-664-3710 (内線 4100)

国際経営研究所 公開講演会 武田段氏 「国際経営 in シンガポール」

田中 則仁

武田段さんは、2003 年の本学経営学部卒業生で、現在はシンガポールを拠点にフラワーアーティストとして活躍している。2022 年 6 月 9 日木曜日の 4 時限、神奈川大学みなとみらいキャンパス 4 階の米田吉盛記念講堂では、約 150 名が聴講し、学外の方々にもご来訪頂いた。学生たちは、自分たちと同じ学部の卒業生で、直接の先輩ということもあり、さまざまな経験談や学生当時の日常生活の話題にも、一層の親近感をもって聞き入っていた。

横浜市金沢区のご実家から、湘南ひらつかキャンパスまで片道 2 時間をかけて通学し、大学の往復とアルバイトという典型的な学生生活であったとのこと。在学当時は、特に趣味もなく、国際経営学科ではあったが、当時は海外に行ったこともなければ、行こうとも考えてはいなかったそうである。卒業後に、普通に勤めた会社では同期で一人だけのリストラに遭い退職。そして花屋さんへの転職を経験したことが今日のフラワーアーティストにつながるきっかけになった。人生のキャリア形成では、何が縁やきっかけになるかわからないものである。

しかし武田段さんには、ひとつ取り柄があった。手先が器用で、それを通じて人を喜ばせることができること。小学生の頃にクラスで千羽鶴を折った時、先生から武田君の千羽鶴を見本にしましょうと褒められたことがあったそうだ。この何気ない一言が、武田少年

に自信と意欲をつける大きなきっかけになったのである。先生や大人の一言が、いつかどこかで子供たちの心を燃やすきっかけになるという大切な教えである。武田段さんの話から、学生へのメッセージとして伝えられた 3 点を以下にまとめてみた。

「未来のヒントは過去にあり」

武田段さんが、転職して花屋さんでの仕事に就いた時、いつも感じていたのが、私ならこうするのに、こうしたらもっといいのに、と思っていた感性である。

それは小学生の頃に千羽鶴を褒められた記憶が蘇り、ご自身の手先の器用さがあったからこそその思いであろう。誰しも幼少期から学生時代までの約 20 年間で、人はそれぞれに経験を積み、いろいろな体験をしている。その中で、これは楽しい、これはいくらやっ

ても飽きることがなかった、という事をしっかり見つめ直していくことが、未来のキャリアにつながるであろう。そのようなヒントをきちんと見つけられるまで、しっかりと自分と向き合い、自分を見つめ直すことが重要なのである。

自分のことは自分が一番知っているはずである。しかし、その得意な事、好きな対象をどのように伸ばして、仕事につなげていくのか、それをどのようにして事業化するのかわかなかなか難しいことである。そこは、周囲の人と繋がり、人を巻き込んでいくことも必要で



はないだろうか。人間、自分ひとりでは限られている。周りの人たちとの良い関係性を保ちながら、ギブ・アンド・テイクを忘れずにネットワークを作るよう努力しなければいけない。

「短所を直すより、長所を伸ばす」

武田段さんのこの言葉には、納得する学生が多かった。これまでの学校教育では、短所を直して、弱点を克服することを指導されてきた。高校までの勉強では、不得意科目の克服や、万遍なく平均点をとることに努力を傾注してきた人が多かろう。短所を直すことに注力するよりは、自分の好きな事、得意な事、長所を伸ばすことの方がより生産的で楽しいはずである。ただし、武田段さんはこう付け加えていた。好きなことをやっても、食えなければ意味がない、という指摘である。好きなこと、得意なことをビジネスにするからには、それで売上が立って、利益が出なければいけないという。これはまさに企業家の発想である。



器用な手先で、他にはない美しいものを作り、それに価値を付けていく。そのビジネスモデルの発想が、武田段さんの真骨頂といえよう。ここで大切なのは、フラワーアーティストとしてディスプレイや装飾に価値を付けて、その価値が市場で正当な評価を受け、その対価が受け取れるような仕組みを提供するということである。徒手空拳でシンガポールに行き、今やフラワーアーティストとしての名声を確立した武田段さんの、一流の企業家としての側面である。

「心を燃やせ」

武田段さんの3つめのメッセージは、『鬼滅の刃』に

登場する煉獄杏寿郎のセリフであった。竈門炭治郎への有名な遺言である。

胸を張って生きろ

己の弱さや不甲斐なさにどれだけ打ちのめされようと

心を燃やせ歯を喰いしばって前を向け

君が足を止めて踞っても時間の流れは止まってくれない

共に寄り添って悲しんではくれない

炭治郎は最終決戦で、煉獄杏寿郎の遺言「心を燃やせ 負けるな 折れるな」を思い出して勝利したのが話の流れである。

武田段さんは、今でこそ一流のフラワーアーティストとして活躍しているが、これまでの10数年間、決して順風満帆ではなかったとのこと。大変な時期もあったであろう。そして大量



武田段氏ご提供の作品写真

注文があり、それを4日間でどのようにして製作し納品するか、ピンチをチャンスに転換できたことが今日の成功につながっている。その時に、この「心を燃やせ」ことを考えたのであろう。

武田段さんは、2018年にも当時の湘南ひらつかキャンパスで講演会に登壇して頂いた。この4年間、コロナ禍での厳しい状況を越えて、みなとみらいキャンパスに再訪して下さった。武田段さんからは、こうした後輩への語りかけは、大学への恩返し、と言って頂いた。この話を聞いた学生諸君が、いつか次の恩返しに、大学にて講演をして頂けたら、善の循環になるかなと思った講演会であった。

(所長/たなか・のりひと)

「海とみなと研究所」が目指すもの

海とみなと研究所所長 関口博正

はじめに

本学の前身である横浜学院は 1928 年に設立された。その開学の地での“みなとみらいキャンパス”の開設は「原点への回帰」であるとともに、新たな「船出」とも言える。「海とみなと研究所」(Research Institute for Marine and Port Studies : RIMPS)はその一年遅れの 2022 年 2 月 1 日にキャンパス内に開設された。

同研究所は、これまでの研究成果を発展させ、その知の蓄積と今後の研究・教育を社会還元すると同時に、海洋関連の産官学連携拠点の役割を担うことが期待されている¹。

現に向けた臨海部環境改善や横浜港の機能強化等に関する協力関係を築くことを予定しており、本研究所はこれらの先行的協定の具体的な活動の担い手となることが期待されている。

更に、2022 年 1 月には、一般社団法人横浜港振興協会と包括連携協定を締結した。大学が港湾産業を担う企業の連合体と包括協定を結ぶのは、国内では他に例を見ないユニークな協定といつて良いであろう。この協定は、大棧橋国際客船ターミナル等の港湾施設等を活用した観光振興、大学生の就職支援とキャリア形成の推進などを目的とするものである⁴。



(出典：同研究所パンフレット)

1. 「海とみなと研究所」設立の経緯

本学では、数年前より海（沿岸・沖合）とみなと（港湾・漁港等）に関する多角的な研究を行う研究機関の設置を検討してきたが、昨年夏以降、その準備活動を本格化させて本年 2 月の創設に至った。また、本研究所の設立に先立って、本学は横浜市と二つの包括連携協定を先行的に締結してきた。地域活性化等のための「包括連携協定」(2020 年 3 月)² と、「臨海部における現代的・先端的課題の研究、横浜港の機能強化及び人材の育成に向けた相互協力に関する協定」(2021 年 12 月)³ がそれである。これらの協定の下で、本学と横浜市は、脱炭素社会の実

2. 「海とみなと研究所」の構成と研究活動の概要

本研究所は、所員数 12 名（学内教員 10 名、上席研究員 2 名）で、本学の既設の研究所が基本的に学部・研究科に直結しているのに対して、本研究所の構成は学内横断型であり、各学部から 10 名の教員が参画している。その研究領域は、産業政策、行政法、地方自治、環境法などの人文社会科学系のほか、海中音響、海洋生物、再生エネルギー、知能情報・システム工学、都市計画・まちづくり等の理工学系など多岐にわたっている。そして、今後、本研究所では、「海洋産業研究」、「海とみなとに関する歴史研究」、「港湾の機能に関する研究」「港湾隣接地域のま

¹ https://www.kanagawa-u.ac.jp/att/23043_00.pdf

² https://www.kanagawa-u.ac.jp/pressrelease/details_19881.html

³ https://www.kanagawa-u.ac.jp/att/22913_00.pdf

⁴ https://www.kanagawa-u.ac.jp/pressrelease/details_22957.html このプレスリリースで本研究所の創設を予告発表している。

ちづくりに関する研究」を柱とした取り組みを目指している。また、学外から、研究所の運営について助言し各種活動に参画することを任務とする上席研究員2名を招聘した。來生新⁵と中原裕幸⁶の両氏である。

なお、研究所の運営は外部資金によることを原則としている。既に本学では外部資金を得た場合に、期限付きのプロジェクト研究所として運営して来た実績がある。「海とみなと研究所」は、海に関する総合的なプロジェクト研究所としての性格を一方で持ちながら、他方で組織としての終了期限を設けない永続的な性格を併せ持つ点で、従来の学内組織とは一線を画すと言って良い。

ただ、神奈川大学にとって外部資金の獲得は必ずしも得意分野ではない⁷ことに加え、他の研究所等の運営方針との整合性を図って行くことも今後解決すべき課題である。

ここで、本研究所の所員が学外の機関と連携して研究を進めているプロジェクトが既にあるので、その例を紹介する。

① 「みなとの歴史ガイド」(横浜市)の認知度及び運用改善調査

一般財団法人みなと総合研究財団の「令和4年度未来のみなとづくり助成」公募に応募して採択された調査プロジェクトである。横浜市港湾局は2021年9月にスマートフォン向け「みなとの歴史ガイド」システムの運用を開始したが、運用され始めたばかりで、同システムの認知度や利用者評価等についての追跡調査は未着手となっていた。そこで、このプロジェクトでは、本研究所が横浜市港湾局と連携しながら、みなとみらい地区でのアンケート調査等を行い、同システムの改善点等を検討することを目的

としている。これにより、横浜市の港湾を中心とする観光や歴史学習の改善に貢献する成果が期待される。

② 水中ソーラー発電システムの研究

水中ソーラー発電の研究は、ソーラー・パネルを海面直下に設置することにより、パネル温度が下がり、発電効率が上昇するというメリットに着目したものである。研究所発足以前から着手されていた本研究を、横浜市港湾局や民間企業との連携をいっそう深めつつ、海域での実証研究に進む予定である。

むすび

筆者は、2022年3月に東京湾再生官民連携フォーラム主催の講演会で「海とみなと研究所の設立・東京湾への取り組みと社会連携」と題する講演を行い⁸、本研究所の取組方針や、本学が10年間継続している横浜港でのシーカヤックを用いた体験型研修による単位認定制度の教育活動の紹介を行った。また、本年度後期には、2名の上席研究員による「横浜の海、日本の海—海洋の世界史の視点から」と題する一般向け連続公開講座も実施予定である。今後とも、カーボンニュートラル等の時代の要請に応える研究を充実させ、「海とみなと研究所」の存在を世に問うてゆきたいと考えている(本稿は笹川平和財団海洋政策研究所”Ocean Newsletter”2022年10月20日号掲載予定の投稿を一部変更の上、掲載している)。

(所員/せきぐち・ひろまさ)

国際経営研究所からのお知らせ

- ✿ 国際経営研究所の規程改正により、学内の他学部の専任教員との共同研究プロジェクトが可能となりました。
- ✿ 国際経営フォーラム33号原稿締切
9月30日(金)(査読は9月21日締切)
2022年度テーマ:『ボーダー』

⁵ 放送大学前学長・名誉教授、横浜国立大学元副学長・名誉教授、日本沿岸域学会前会長、日本海洋政策学会顧問・前副会長

⁶ 神戸大学客員教授、横浜国立大学講師、日本海洋政策学会理事、(一社)海洋産業研究・振興協会顧問、元JAMSTEC監事、元日本沿岸域学会副会長、元東海大学講師

⁷ 例えば、本学における共同研究と受託研究の2020年度の合計額は、民間企業からの受け入れが8千万円、国研・自治体等からの受け入れが8.7千万円となっており2018年以降2億円を上回っていない(研究活動の実績 <https://www.kanagawa-u.ac.jp/research/adoption/>)。

また、データが少々古く、しかも一般寄付金を含む集計値での比

較ではあるが、東洋経済 ONLINE(2018/10/27)によれば、神奈川大学の2016年度寄付金は2.02億円、私立大学157校の寄付金ランキングは91位だったのに対し、同年の寄付金収入1位は慶應義塾87.39億円である (<https://toyokeizai.net/articles/-/245639?page=4>)。

⁸ 東京湾再生官民連携フォーラム主催「CSR-NPO 未来交流会2022」(2022年3月16日)

http://www.tbsaisei.com/csr_npo/csr_npo2022shiryu.html

なお、同交流会では、東京湾官民連携フォーラムの議長でもある來生新・上席研究員が「カーボンニュートラルと官民連携フォーラム」の演題で講演している。